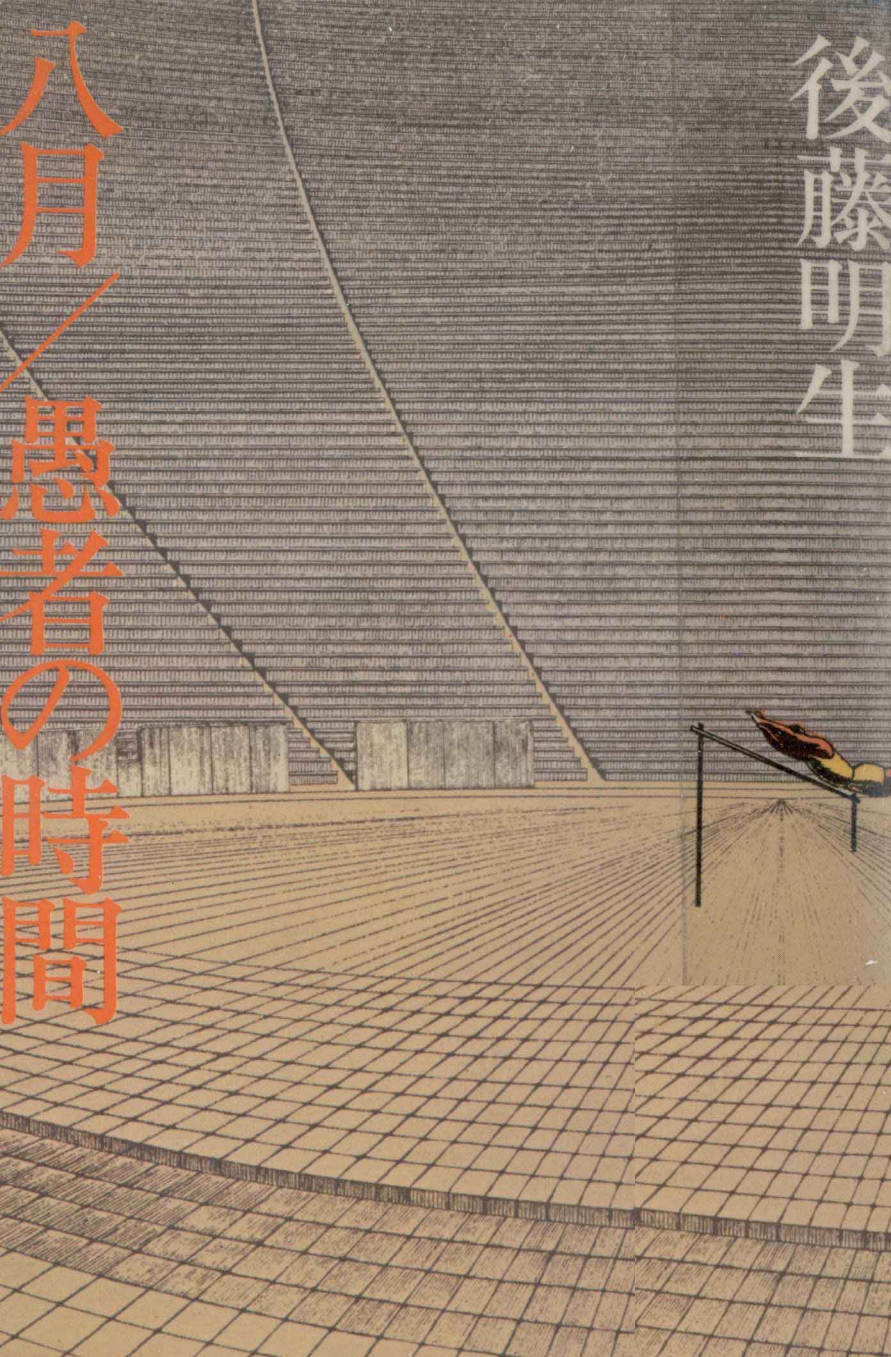


後藤明生

八月／愚者の時間





後藤明生（ごとう・めいせい）

一九三二年、北朝鮮の永興で生まれる。一九四五年、元山中学に入學。翌年、福岡県甘木に引揚げ、県立朝倉中学に転入。一九五五年、早稲田大学露文科に在学中「赤と黒の記憶」が第四回全国学生小説コンクールに入選する。一九六二年、「関係」が第一回文藝賞佳作、一九六七年、「人間の病氣」が芥川賞候補作となる。一九七七年、「夢かたり」で第五回平林たい子文学賞を受賞。著書として他に「私的生活」「笑い地獄」「挟み撃ち」「思い川」「笑坂」「行き帰り」「嘘のような日常」などがある。季刊文学雑誌「文休」編集同人。

八月／愚者の時間

一九八〇年四月二〇日第一刷印刷
一九八〇年四月二五日第一刷発行

定価 二二〇〇円

著者 後藤明生

発行者 寺田博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒〇三 電話 〇三二六二九七五三
振替口座（東京）六一七一八三

印刷・製本 図書印刷

（落・乱丁本はお取替え致します）

八月／愚者の時間——目次

後記	284								
附『朝倉』を読んで									279
麻氏良城	243								
針目城	223								
恋木社	197								
綾の鼓	165								
愚者の時間									143
*									
八月	109								
通院	85								
雨	65								
夢	33								
宝船	7								

装画
丁

菊寺
地田
信有
義恒

八月／愚者の時間

後藤明生作品集

宝船

年末に宝船というものをもらった。正月の晩、枕の下に敷いて眠るとよい初夢が見られるという。わたしがもらったのは、どこかの会社の宣伝用のものらしかった。それで、はじめは気づかずに、捨ててしまった。あとで妻にいわれて気がついたのである。

わたしは宣伝用のパンフレット類を、あけて見ることもあった。周知の通り、宣伝用パンフレット類は年々増加し、豪華になっている。いつだったか、ある小説家が、毎日毎日ダイレクトメールばかりが押し込められている郵便受けの中に、ある日一枚の古い知人からの手紙を見出した。初老の男が、年甲斐もなく、少女のように雀躍りする様を書いていたが、確かにいまわれわれが生きているのは、そういう時代なのだと思う。

もちろん、パンフレットの中には、面白いものもあった。有益なものもあった。いますぐには読んでみる暇もないし、買う気にもならない種々の復刻本などの広告類は、ファイルを一つ作って、そこに綴じ込むこともしている。ただ、大部分は、その場で右から左へ、ダイニングキッチンテレビの下の木箱の中に放り込まれた。封を切らないものもあった。古新聞もそこに入れ

た。そうして置いて、毎週月曜日と木曜日に階下の定められたゴミ捨て場に運ぶのである。

わたしは、至極く平凡なコンクリートの建物の五階で暮していた。ここへ移り住んでもう五年になるが、以前にいた場所も、似たようなところで、それを合わせると、似たような部屋でもう十五、六年暮していることになるのだった。こういう四角い箱の中で暮しているものは、古雑誌一冊、自由に捨てることが出来ない。決った曜日に決った場所へ運ばなければならない。それはまあよいとして、古手紙一枚を燃やすことが出来ない。

以前にいたところは、確かに似たような四角い箱ではあったが、ところどころに共同の焼却炉があったのは、救いであった。焼きたいものはそこへ持って行って、焼き捨てることが出来た。今度のところにはそういうものがなかった。年々、焼却炉は廃止の傾向にあるということである。以前わたしが暮していたところでも、廃止になったらしい。そんな噂を、だいぶ前にきいたような気がする。ずいぶん離れた、遠いところからの噂であるが、何かのはずみで、妻の耳に入ったのだろう。そしてわたしの耳に入った。

理由は、煙害ということらしい。また、焼却炉を取りつけてある棟の壁が、熱のためにぼろぼろになるということもあるらしい。そんなことは作るときに考えられたはずだと、わたしはもはやそこに住んでいるわけでもないのに、妻から噂をきいて、公団というオカミに腹を立てた。地面に足のつかない宙吊りになった部屋で暮している、平凡な一小市民として腹を立てた。そして、年の暮れに古手紙を焼却炉で燃やしたことを思い出した。燃やすのはだいたい夜であった。しかし、焼却炉は、とつぜん異臭を放つこともあった。ある日、異臭は焼却炉の煙突から鉄錆色

の煙とともに吐き出されていた。誰かが猫を燃やしたのだという。まだ小学校に上る前だった長女が、どこからか生れたての仔猫をもらって来たのは、そのあと暫くしてからだった。

わたしたちは、こっそり仔猫を飼いはじめた。公団の団地では犬猫を飼えない規則だった。しかし、あちこちで飼われていて、焼却炉で焼かれたらしいのも、長女がもらって来たのも、そのうちの一匹だった。わたしたちが飼いはじめたのは、平凡なトラ猫で首から胸にかけての部分と、四肢の先だけが白い毛だった。五年前、猫はわたしたちと一緒にいまのところへ引越して来た。そして、いま六歳である。

古手紙を焼くことが出来ない、ということとは、何かをひどく無視されたような気がした。古雑誌やダイレクトメールとは違うのである。そういうものならば、重ねて紐で縛って、決められた曜日に決められたコンクリートの置き場に運び出せばよかった。紐でくくって束にするのは、だいたいわたしの仕事だ。それを運び下ろすのは妻と子供たちの仕事で、時間はわたしがまだ眠っている朝早くだった。紐は、小包や本などについて来る古紐を使った。ナイフや鋏を使わずに、いちいち手でほいてボール箱に取って置くのである。そのため手の爪が痛くなることもあった。紐は、この五階に越して来てから五年分溜っていた。そして、更に溜り続けていた。週に二度、古雑誌やダイレクトメール類の束を縛るだけでは、ほとんど減らなかった。

わたしはそういったものを縛ることは、決して嫌いではない。一尺五寸程の高さのものが二つ出来ることもあった。一つのこともあったが、十文字にきちんとからげられた束を眺めて、職人のように満足することもあった。また、ボール箱の中をかきまわし、小さな鉤のついたさげ手を

探し出して、取りつけることもあった。しかし、古手紙はそうはゆかない。束にして紐で縛ってゴミ捨て場に運び出すことは出来なかった。そうする気にはなれなかった。仕方なく古手紙は、規定の大袋に入れてゴミ捨て場に出した。茶色い丈夫な紙の大袋で、中身の区別は燃えるものと燃えないもの、それと台所の生ゴミらしい。それ以上の区別は、外からはわからなかった。それは、救いといえど救いともいえた。しかし、何かが無視されたような気持はなくならなかった。そして、それはどこかのオカミから無視されているという気持だった。トラックに乗ってゴミを集めて来る作業員が目に見えた。灰色がかった作業服を着た彼らは、オカミの手下たちだった。しかし、古手紙の処理法についてどこからか苦情が出たという話はきかなかった。妻にたずねてみたが、ないらしかった。そんなことより、大袋に捨てるゴミを間違えないようにして欲しい、と妻はいった。

「その場で機械にかけられて、すぐわかつちやうんですから」

「機械？」

「そう。車に積み込むとき、機械が袋をこまかく砕いちやうから、その場で見つかつちやうわけですよ」

「ふうん、そんなことするのか」

実際、わたしは初耳であった。

「だから、誰かがいい加減なことをしていると、このハイツ全体が迷惑しちやうわけよ」

「迷惑？」

「ゴミを集めて来てくれなくなるわけ」

「生ゴミとか何かを混ぜこぜにしておくということだな」

「そう。燃えるものと燃えないものとかね」

「ふうん」

「ずいぶんうるさいみたいですよ」

「じゃあ、吸い殻は、どっちなんだ？」

「吸い殻は、燃える方です」

「しかし、セブンスターの吸い口は燃えないよ」

「でも、そこまではいわないようだよ」

「なるほど。しかしだね、セブンスターの袋は、一番外側がパラフィン紙だし、内側には銀紙だぜ」

「そういえば、そうだね。でも、燃える方でパスしてるみたい」

「じゃあ、即席ラーメンの袋は？」

「その程度は、燃える方ね」

「じゃあ、キツネどん兵衛は？」

「あ、あれは駄目ですよ。あのどんぶりは発泡スチロールですから」

「ふうん」

「それから、ビニールの袋は、どんな小さいのでも燃える方には捨てないで下さい」

「まるで検察官だな」

「でも、車に來られなくなったら、本当に困っちゃいますからね」

「それが奴らの愉しみだな」

「でもね、中にはずいぶんいい加減な捨て方する人もいるんだから」

「トラックのご機嫌損ねちゃ、大変なわけだ」

ハイツ内のゴミ捨て場の位置は、わたしも知っている。西側の道路に面した芝生の端にブロックで囲われていた。ある日、わたしがそこを通りかかると、ゴミ捨て場には塵一つなかった。ブロックに囲まれた四角いコンクリートの場所は、きちんと掃き清められ、ハイツ内のどこよりも清潔に見えた。舗装された通路よりも、階段よりも、である。それはあたかもハイツ内の主婦たちの怖れそのもののように見えた。実際、その場所は、ゴミ捨て場ではなく、「ゴミ置場」だと書かれていたのである。いっそ、しめ縄でも張ればどうだろうか。当番を決めて、トラックが来ない日には御幣をつるし、みだりに立ち入ってはならない。塩を盛った方がいいかも知れない。小さな鳥居を作るのも悪くないだろう。小便禁止！ なにしろ、たたられては困るゴミ神様なのである。

わたしは一度、深夜に幾つかのダンボール箱をこっそりそこへ運んだことを思い出した。ゴミを捨てる時間は厳しく定められており、それはトラックが来る日の、朝六時からに限られていた。それ以外の日にはもちろん厳禁であり、前の晩に出して置くことも許されなかった。夜のうちに雨が降ることも考えられるし、前夜の持出しを許せば、それこそ我勝ちに運び出して、時間のけ

じめは事実上無くなってしまうからであった。あるとき、思い立って仕事部屋を片づけると、一尺五寸程の古雑誌の束が六つか七つになった。これではとても、朝だけでは運び切れない。長男と長女に手伝わせば、もちろん不可能ではないが、なにしろわが家は五階であり、それに運ぶべきゴミは他にもある。生ゴミもあれば、その他もある。妻にそういわれて、わたしは古雑誌の束をほどこき、ダンボール箱に詰め替えたのだった。ダンボール箱は四つくらいになったのだと思う。そのため月曜日のトラックには間に合わなくなり、ダンボール箱は仕事部屋に何日か積み上げられていた。そして次のトラックの日の前日、深夜に及んで、こっそり担ぎ出されたのである。わたしは一人で、ダンボールの数だけ、五階の階段を往復した。子供に手伝わせなかったのは、深夜でもあったが、とにかく違反行為だったからだ。ダンボール箱に詰め替えたのも、同様だった。せめて、きちんと箱詰めにするこゝとで、なにがしか罪を軽くしたいと思ったのである。

幸い、誰にも出会わなかった。しかし、それは違反者はわたしだけだということでもあった。少なくともその夜はそうだったのであろう。ブロックに囲われたゴミ捨て場には塵一つなかった。まるで、月光に清められたとでもいうようである。わたしは運んだダンボール箱を、ブロックで囲われた四角いコンクリートの隅に、押しつけるようにしてきちんと置いた。二つ目の箱はその上に重ねた。三つ目の箱はその脇に押しつけ、四つ目はその上にきちんと重ねた。そして、トラックがやって来るまでは雨が降らぬことを祈るような気持で、明るく照っている月を見上げたのである。月は満月の前であったか、あとであったか、季節も春であったか、秋であったか、定かでない。ただ、半円形よりやや大きめの月は中天にあった。そして、ブロックに囲まれ